



図書館とフィルムルックス

阿由葉 考二郎

I. はじめに

フィルムルックス株式会社(以下、当社)は、1973年に医療器具などの貿易会社である欧和通商株式会社のフィルムルックス部門が独立し、ドイツ・ネーシェン社の日本国内での総代理店として設立され、31年が経過いたしました。日本国内においては当社が初めて糊付き透明ブックカバーを紹介し、今日では多数の公共図書館・学校図書館にご利用いただくまでにいたっております。

製造元のネーシェン社は元来、糊のメーカーとして110余年の歴史を誇り、有機溶剤を含まない水溶性の糊を塗布した図書用ラミネートフィルムや、紙資料の補修保存用品をアメリカ・EU諸国をはじめ世界各国に子会社および合弁企業を設け販売しています。

ネーシェン社の有機溶剤を含まない水溶性の糊は、米国食品医薬品局(FDA: food and drug administration)やドイツ連邦保険局(BGA)など、権威のある機関の安全基準をクリアしており、この糊を使用した一部製品は、医療用製品である手術後の切り口をふさぐばんそうこうなどで医療機関にてご利用いただいています。

このように、ネーシェン社は人と環境にやさしい製品の製造を行っています(図1)。

II. 図書館との連携から

当社設立当初、フィルムルックス製品は、図書館用品を既に販売している丸善株式会社・株式会社伊藤伊(現 株式会社伊藤伊新社)を通

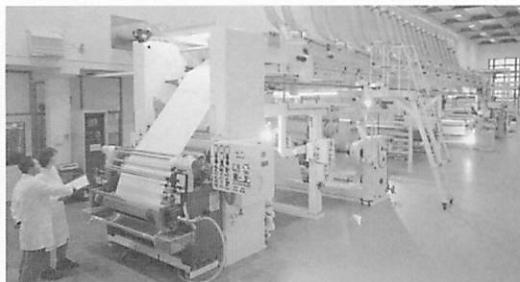


図1. フィルム製造の様子(ドイツ・ネーシェン社)

して全国展開したものの、あまり普及しませんでした。

しかし、1970年代初旬に「暮らしの中の図書館づくり」をめざして始動した、東京都の図書館づくり政策の活発な流れの中で、図書館は学生や一部の好事家が利用する施設から、住民が日常的に利用する施設へ変化しました。そんな時期に、全国の公共図書館や学校図書館のすべての図書にフィルムコーティングする要求が高まり、大量に扱い高が増えました。

1960年代の図書館は、図書の装備といえば背ラベル(請求記号ラベル)を貼付しただけで、図書はとても古く、ジャケットが破れたり擦り切れたり、とても奇麗な状態ではありませんでした。このような日本の公共図書館や学校図書館に対し、欧米の図書館は図書の保護・保存を目的に糊付き保護フィルムをラミネートしているといった現状を紹介し、フィルムの販売を行ってまいりました。しかし、フィルムは当時としては高価であり、拡販していくには時間がかかりました。

その後、東京都が「図書館復興プロジェクトチーム」を発足させ、図書館問題研究会では

「当面の重点を貸出しの伸びにおく」を運動方針として決定したことにより、図書のラミネートの重要性が目されるようになってきました(図2)。

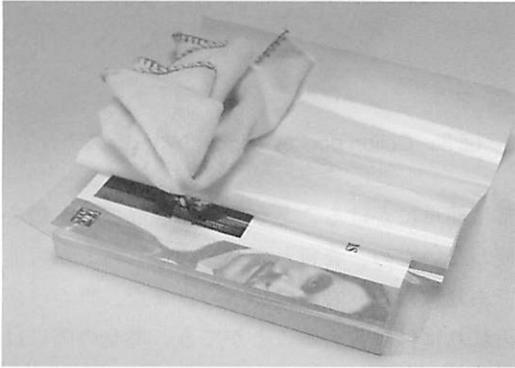


図2. 図書フィルムコーティング

Ⅲ. 納入システムの完成

1971年、書籍・雑誌を全国の書店に卸販売する出版取次会社である株式会社大阪屋（以下、大阪屋）と業務提携をし、フィルムコーティングをした図書を図書館に納入するシステムを開発しました。さらに、図書館に図書を納入している地元書店との三者での装備付き図書の納入システムを完成させ、その第1号として1975年5月、東京都三多摩地区の昭島市民図書館のオープンに参画しました。そのシステムとは、地元書店が集まり図書館納入組合を結成し、各市区町村自治体はその受注契約先となり、取次会社である大阪屋が集品し、当社が整理・装備し、納入後即貸出できるような体制のことで

す。その後、このシステムは清瀬市・小平市に広がり、現在では全国に広がるまでに至っています。

このような形で、図書館には衛生的で綺麗なフィルムコーティングされた図書が普及し、貸出増につながったと自覚しています。

次に、個人的に図書を大事に扱いたいという声や、その他透明接着シートとしてノート、楽譜、写真などでの使用を求める声がお客さまよ

り上がり、全国の文具・画材店でのフィルムの設置を試みました。営業が東京、大阪、名古屋の主要都市の文具・画材店を市場調査し、文具店主と協議したところ、需要ありと判断しました。個人用には、フィルムルックス609（32cm×1.5m巻、50cm×2.0m巻）を文具・画材の流通形態として、卸会社を通して全国展開を試みました。東京のアイワ通商株式会社、株式会社武田製図機械製作所、名古屋の株式会社青雲クラウン他、全国の主要卸会社を通して文具・画材店への設置販売が始まりました。同時に東京銀座にある世界の輸入品を扱う株式会社伊東屋にも、ブックカバーおよび補修・製本用品のプラスチックT・プラスチックP・プラスチックP90などのフィルムルックス製品コーナーが確立され、そして、株式会社東急ハンズ、株式会社ユザワヤなど大型店での設置販売が次々と拡大されました。

その後、国産フィルムメーカーも参入し、図書館界では全面コーティングされた装備付き図書の納入が通常となりました。

Ⅳ. 図書館設立ブームと支店拡大

約20年前から図書館の電算化が進み、文部省（現 文部科学省）の後押しもあり、東京や大阪の主要都市だけでなく東北や九州地区でも図書館設立ブームがありました。同時に、図書館に納入するMARC（機械可読目録）の納入システムの競争が、市販MARC3社（株式会社図書館流通センター、日本出版販売株式会社、大阪屋）で行われました。当社も大阪屋と提携し、「安くて早い」を売り物にした、MARC+整理・装備の図書館営業戦略に入り、現在に至っています。

前記したように1973年に設立後、東京三多摩地区および埼玉県浦和市、大宮市、春日部市などの地元書店組合と大阪屋と当社の三者で図書館納入システムを確立したことにより、大量に装備できる工場の必要に迫られ、当社は、武蔵村山市に多摩営業所を設立しました。その後、

大阪屋は大阪が本社であるため、大阪に図書館課を設けました。大阪屋には帳合書店^{注1}が多く、各市区町村の書店組合の結成もスムーズに行われ、大阪および近隣県内市町村で急速に3者での図書館納入システムが広がりました。そのため、大阪屋と当社の合同で大阪営業所を設立しました（現在は当社単独）。同時進行で、愛知県名古屋市を中心として近県にも広がり、名古屋営業所を開設しました。また、先にも述べましたが、1987年頃の図書館設立ブームが九州地区で始まり、小都市での公民館図書室から10万冊規模の新設図書館が各地で設立されました。その7割程を3者での図書館納入システムで受注することができ、九州営業所を設立しました。

V. 保存業界へ：コリブリ・ブックカバーシステム

当社は、このように、ネーション社からのフィルム製品・補修製本用品の輸入販売や、装備データ付き図書の納入販売として、業界に地位を築いてきましたが、1993年から保存業界へも参入しました。和紙状の熱圧着材であるプラストRを酸性紙の劣化を抑える材料として発売し、また、液相法による脱酸マシンC900を使用した大量脱酸システムを日本国内に紹介しています。

また、2000年には企画開発部を設立し、欧米諸国の図書館用品メーカーの、製品の輸入販売を開始いたしました。

イタリア・コリブリシステム社のコリブリ・ブックカバーシステム（図3）は、書籍・資料にピッタリサイズの糊なしフィルムカバーを非



図3. Colibri pocket book カバーシステム

常に簡単にかけることができる製品です。糊を使わないため、資料とカバーの取り外しが可能であり（なおかつ外れにくい）、また、カバーが汚れれば付け替えることができ、廃棄の際には資料とカバーの分別ができるといった特徴があります。

また、なんとと言ってもこのコリブリ・ブックカバーシステムの最大の特徴は、作業性の良さです。特別な技術や経験は問わず、簡単な操作でしかも短時間でカバーリングできます。さまざまな図書館から幼稚園の書架にある絵本まで、あらゆる資料のカバーリングに役立っています。なお、欧米諸国では病院図書館でも活躍していることを付け加えておきます。

現在の図書館界では、IC タグ・カウンター委託・PFI・指定管理者制度など、数々の新しい製品や制度が登場し、飛躍的な速さで変化しています。

当社もこの変化のスピードに負けることなく、海外の優れた商品を輸入・紹介し、また新たな図書納入システムを開発・提案し、図書館の発展に貢献していきたい所存でございます。

注1) 帳合書店：書籍・雑誌の卸問屋である出版取次(大手取次として株式会社トーハン、日本出版販売株式会社、大阪屋など)が委託販売している書店のこと。大型書店の紀伊国屋などは株式会社トーハン、日本出版販売株式会社の両取次から仕入れている。